



昨年12月号より北海道医報誌上において特集「北海道の医療崩壊を立て直す」が連載中である。次号の3月号では行政、自治体、住民グループ、歯科医師会、薬剤師会、看護協会、それにマスメディアから今回の特集に対しての評価、批判をいただいて特集を終る。会員各位は今回の特集をご覧になってどのような感想、意見をお持ちになったであろうか。この特集が北海道の医療を立て直しの一翼を担えれば、この企画をした者にとって大いなる喜びである。熱いメッセージをいただいた執筆者の方々にこの場をかりて感謝申し上げます。

この特集の企画の意図は、もちろん「北海

特集「北海道の医療崩壊を立て直す」を終えるにあたって

情報広報部長 山科 賢児

道の医療崩壊をどうか食い止められないのかという願いからである。しかしあまりにも大きな命題であるために、企画の段階でこの問題に手を付けたら收拾がつかなくなるのではないか、明確な解決の策はないのだから執筆できない、既にさまざまな解決策は書き尽くされているという声もあつた。正直なところゲラ刷りを読むまではステレオタイプな提案や悲観的意見ばかりが集まるのではないかとという危惧が脳裏をかすめていたが、結果は医報を一読すればご覧の通り、北海道への医療への熱い思い、また医師としての強い誇りを感じさせる素晴らしい原稿ばかりがそ

ろつた。感動さえ覚える。

いつの頃なのか定かではないが、医療崩壊は今や特別な現象ではなく当然の既成事実であるように認識されている。しかし本当のところ医療崩壊の実態は一体どうなっているのか、また我々医師会会員が解決できないレベルの問題なのだろうか。そんな北海道の医療はなんとなつていっているのではないか。そのような疑問に対し直接会員各位から声をいただき確認するのがこの特集の目的でもあつた。特集を読むと特徴的なことに気づく。それは地域医療を担うセンター病院からの発信は医師不足の深刻な悩みがほとんどである一方、診療所の医師たちの文面からは大変な苦

労はあるが、地域医療に携わっていることへの充実感、楽しんでいく雰囲気や伝わってくるのである。

新医師臨床研修制度が動き出し、医局制度が崩壊し始め、医師各々が専門分野、働きの場を自ら自由に決められる時代となつた今、医師が地方の医療機関に勤務するには条件が必要となつた。若い世代の医師にとつて一番の関心事は研究、臨床のキャリアを高めることであり、長期間の地方勤務はそれを阻むと決め込んでいるところもある。そんな考えを払拭し、専門医、研究者をも目指す研修システムがぜひ必要になる。安定した精神状態、人間関係が医師の仕事の質を左右する。そのためには一生活者である医師にもプライベートの部分が重要である。経済的条件も大切だが、医師や家族と、

医療スタッフや地域の住民との間に程よい距離のコミュニケーションの存在は医師が地方で勤務、生活を続ける重要な要素となる。一方、医師の人事が医局の手から離れることによつて医師像の多様化が進み、地域医療の真髄である人間志向の医療に価値観を見出す医師たちが多くなるかもしれない。医師の生涯研修システムと地域医療への貢献や充実感が連動すれば、医師不足が解消するかもしれないと考えるのは楽観的であろうか。それに厳しいが魅力的な自然を抱く北海道には、すべての世代の医師にとつて素晴らしい職場環境がある。

私事であるが、掲載記事を読んでいると、へき地診療所、地方都市病院の医師であつた父と共に北海道内を転々としていた幼い頃を思い出す。今振り返ると、往診について行ったり、診療室で診療する父の姿からは、職業を選ぶ上でも医師となつてからの姿勢にも大きな影響を受けている。そして子供心に地方の市町村の医療機関における医師の誇りや悩みをそれなりに理解し、そこに良き時代の医師の良き姿を垣間見ていた気がする。

我々が抱える医療の問題の一つをこの特集によつて確認した。今後もこのような作業は続けていかねばならないのと同様に、問題点、解決策を提示するだけにとどまることなく、医師会の解決に向けての行動がなければこの特集の意味はないのではないか。それには斬新な考えを持ち、機動力のある人材が不可欠となる。北海道の医療を取り巻く多くの関係者と良好なコミュニケーションをとり、時には押し、時には引きながら医師会を主張する。そして一歩一歩前進する。その実現には決断力を備え、したたかな現実主義に裏打ちされた夢を語る北海道医師会が必要となる。